In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	早期の瞿秋白：『餓郷紀程』小論
Author	松浦, 恆雄
Citation	人文研究. 36 巻 3 号, p.119-138.
Issue Date	1984
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

早期の瞿秋白 ——『餓郷紀程』小論

松　浦　恒　雄

1

1920年11月27日，北京『晨報』の第二面には，次のような上海『時事新報』との共同告示が載った(1)。

「我が国の新聞は，これまで各国の真情を探る特派員が海外に居らず，欧米の消息に関しては殊に簡略な点が多かった。（中略）これは誠に我が新聞界の一大欠点である。我が二紙はこれに鑒み，特に経費を合わせて専任者を選択派遣し欧米各国に赴かしめ，調査通訊の事宜を担任させ，我々の天職を僅かなりとも尽し，新聞界の一新紀元を開かんと冀うものである。」

共同特派員の派遣先としては，アメリカ，イギリス，フランス，ドイツ，ロシアの名が挙がり，ロシア特派員には「瞿秋白，俞澹盧，李続忠」の三名の名が記されていた。

当時，弱冠21才の瞿秋白は，まだ，俄文専修館を卒業してはいなかった。だが，彼は『新社会』紙上の諸篇や『晨報』，『学灯』などへの投稿を通して，些かその名をジャーナリズム界に知られていたようである。例えば，天津『大公報』に多くの改革を加えた胡霖は，欧州視察からの帰国後，副刊の改組を謀る招宴に，瞿秋白を招いている(2)。また，人を介してではあるが，研究系の蔣方震（百里）とも知り合い，彼の主編する「共学社叢書」から『托爾斯泰（トルストイ）短篇小説集』を出版したりもしている(3)。このことは，研究系の機関誌であった『晨報』や『時事新報』との繋がりを瞿秋白に与えてくれたかも知れない。更に，この人選については，常州府中学堂時代の友人孫九録の強い推薦があったともいう（彼の叔父は進歩党の国会議員で『国民日報』，『晨報』の主筆であった）(4)。瞿秋白自身ものちに「友人が私を紹介してくれ，合格と認められた」(5)のだと口述している。いずれにしろ，瞿秋白がその才を大いに頼まれて抜擢されたことに間違いはあるまい。

かくして，瞿秋白は，1920年10月に北京を発つ。そしてモスクワ到着までの三カ月余りの「見聞経過，具体的事実，及び心の道のりに於ける変遷起伏，思想理論」を全て文章に纏め，「体裁」としては「随感録」の形を採ったというのが，『餓郷紀程』なのである。

2

瞿秋白の出発前夜の中国では，新文化運動の流れを汲む数多くの雑誌が，革命ロシアの政治体制を紹介し，その地を訪れた人々の旅行記を連載し始めていた（その多くは訳載であったが）。また，『新青年』の「俄羅斯研究」欄をはじめとして，『少年世界』や『改造』による系統的紹介も試みられていた[6]。それは，五四運動以降の澎湃たる社会主義理論の伝播とも密切に関連した時代思潮の趨く所であった。しかし，それらの中には，同一現象に対して，全く相反する結果を見てとるが如きものもあり，必ずしも客観的正確さを印象づけるものばかりではなかった[7]。それらの記事に丹念に眼を通していた形跡のある瞿秋白であるが[8]，「網戸を通して朝もやを見る」ような曖昧模糊とした感想を懐かざるを得なかったのである。

一方，現実のソヴェト・ロシアは，白衛軍の叛乱及びそれを支持しかつ強硬に介入しようとする帝国主義諸国の干渉戦争の下，その国民経済は全くの危殆に瀕していた。モスクワやペトログラードの労働者は，一日に一度，50グラム程のパンを支給されるかどうかという生活を余儀なくされていたという[9]。

このような実情を背景に，中国では，ソヴェト・ロシアは戦乱と饑饉に疲弊した危険極まりない国として喧伝されていた。そして，共産主義に対する「洪水猛獣」，「過激主義」というレッテルや「共産公妻」或いは「婦人国有之奇聞」といった評判が，無知により或いは故意によって幅を利かせていたのであった。極東共和国の代表として北京に駐在していたユーリンの車に插してあった赤旗が治安によろしくないとして警察に取りあげられたという笑い話のような実話まである[10]。「一方では極めて進んでいるが，一方では極めて遅れている」中国の社会思想の変態的現象が奇妙な同棲を続けていたのである。そのため，「資本主義諸国の逆宣伝により，十月革命に対しては尚，いくらか冷淡で，かつ懐疑的」[11]であったという魯迅の言は，当時の進歩的知識人のソヴェト・ロシアに対する認識の一端を反映していたと言っ

てよいだろう。

以上のような事情から推して，瞿秋白の赴露に，堂兄瞿純白が驚いたのも無理はない。四年にわたる瞿秋白の北京生活を扶持してきたのは，外ならぬ彼であったし，たとえそれが「家族的な旧道徳」に出ずるものであったとしても，前途有為の瞿秋白に托する所もあったに違いない。況んや，外交部の経営する俄文専修館を優秀な成績で卒業すれば，外交部内の職は保障されていたのである(12)。それを投げ打って「洪水猛獣」の策源地，「恐怖，兇暴，饑饉，疫病，暗殺」(13)の地モスクワへ赴くのであるから，「自ら死地へ赴く」ものと見做されても仕方がない。瞿純白が「当初，極力私（瞿秋白――引用者）のロシア行きに反対した」のも当然の話であった。

しかし，瞿秋白はかくいう。

「……清の管異之は，伯夷叔斉の首陽山を餓郷と称した。――彼らの実際の心理的要求の持つ力量が『周の粟』を食べたいという経済的欲望に勝っていたのである。――私には，私の餓郷がある――ソヴェト・ロシアである。」(14)

管同（異之）に依れば，「餓郷」とは，凡そ餓死した者の辿りつく郷である。この郷に行き着くには，並大抵の努力では成らず，「違世乖俗廉恥礼儀の士」でなければ，或いは「疆忍堅定守死善道の君子」でなければ，行き着くことのできぬ郷なのである。「餓郷」に住人あるは，武王姫発の紂を討つを恥じてその粟を食らうを潔しとしなかった伯夷叔斉に始まるという(15)。

「餓郷記」の冒頭にも述べる通り，「餓郷」とは確かに「天下の窮処」ではあるけれども，志操の高さ，潔癖さにかけては人並み秀れた人々の郷であった。瞿秋白がソヴェト・ロシアを「私の餓郷」と呼んだのは，伯夷叔斉に倣い志に殉ずることも辞さぬ強い意志がその中に込められていたのであり，ロシアにこそ彼自身と志を同じくする志士がいると想像していたからであるに違いない。であるからには，「ロシアがいかに食物がなく着る物がなく」とも，そのことについては「暫く問わない」でもよかったのである。「そこは，詰る所，世界初めての社会革命の国家であり，世界革命の中心点であり，東西文化の接触地である」ということこそが，瞿秋白には問題だったからである。瞿秋白もまた，心理的欲求が「民国の粟」を食べたいという経済的欲求に勝っていた。その心理的欲求の切実さ，高昂さを見るには，「餓郷」への旅の劈頭に据えられた，躍動する生命感に輝く一篇の詩(16)を

見るに如くはない。

涯なき

蒙昧なるかな人生！
　一刹那のうたかたに等し。
暁冴え渡り露結び，
　初日の薄光病めるに似たり 。

露消え露結ぶ，人生の秘事。
　だが見えず溪流の無尽蔵なる意（こころ）
だが見えず大気の旋回にひそむ無微（ことわり）
　隙間より，会得したるや，その間の意味？

『我れ』無限。『人』無限。
　笑怒哀楽に未だ厭かず，
漫天の痛苦を誰か念う，
　困厄の解かるるを待つこと幾歳ぞ？

君知るや？　君知るや？　困厄の解かるるを待つを，
　我れを解き人を解くなり，
目覚めよ，目覚めよ，餓郷へ行かん，
　餓郷は涯なき。

瞿秋白は自己の思いをためらわずに象徴的な言葉に移しとってゆく。その言葉は，「餓郷」へ赴くことに向けて焦点を合わせ，未来への確かな期待でもって収束する。瞿秋白の「目覚めへの旅」の門出にふさわしい緊張感が，快く全篇を引き締めていると言えよう。

3

『餓郷紀程』は，その「緒言」がハルピン滞在中に書き始められ（1920年11月４日），その「跋」はモスクワの宿舎クニャーヂ・ドヴォルで書き収められている（1921年10月）。今，その全体の構成をみてみよう。

第Ⅰ部：「緒言」（プロローグ）
第Ⅱ部：第一〜五章（自伝的部分及び北京——山海関）

第Ⅲ部：第六～十五章（山海関――モスクワ）
第Ⅳ部：第十六章（エピローグ）
第Ⅴ部：「跋」

そこで，今仮りに，『餓郷紀程』が「緒言」のあと旅程の次第を追って次々と書き足されていったとすれば，順にその内容をたどってゆくことで，瞿秋白の心の動き，成長の跡を探ることができよう。しかし，そう仮定してみると，些か不都合な点が出てくる。つまり，「餓郷」へ旅立つ前の瞿秋白を代表する『新社会』所載の文章と『餓郷紀程」第Ⅱ部に属する文章との間には，あきらかに思想的不整合が存在することである。

例えば，『餓郷紀程』の第五章では，中国経済がヨーロッパの植民地政策の波をもろにかぶって奇型的発展を遂げているにもかかわらず，尚ヨーロッパを模倣して「実業を興こし外資を利用」しようとしているのは，「アメリカの資本家の新式侵略政策に騙されたのと，ラッセルがたまたま『中国は実業を興こさねばならない』といったのを聞いて発起したある種の奇妙な『社会主義』の反動である」と，実業救国の幻想並びに社会の発展段階説を利しての資本主義擁護の詭弁に対して，冷静な分析が下されている。これを『新社会』時期に較べれば，成程，「外国貿易の影響」の重大性をうかがわせる見解は見い出せるが，外国資本の侵入に対しては，これを中国国土の未開発のゆえに帰し，中国の実業振興に対しても，これこそ労資間の矛盾を緩和する捷径であると考えているのである(17)。

また，同じく第五章において，瞿秋白は「無政府主義の色彩」を帯びた「『社会主義』の学説」の一つとして「トルスイ流の宣伝」を記しているのに対し，『新社会』の紙面では，「ああ！トルストイ流の汎労働の生活は，我々自らが良心に問うに，当然ではなかろうか」というトルストイ主義の賛同者として登場してくるのである。(18)

これらの事実は，両者の間に横たわる時間的経過，精神的生長の幅がかなり大きいことを暗示していると言ってよいだろう。

一方，『餓郷紀程』に平行する時期に，瞿秋白は多くの通信を『晨報』，『時事新報』に書き送っている（計17篇）。『餓郷紀程』をそれらの記事と照合してみれば，『餓郷紀程』におけるハルピンからチタまでの章は，それらの通信が所々下敷きとして顔をのぞかせ，チタ以降モスクワまでの章は，のちに発表された「自赤塔至莫斯科的見聞記」(19)がかなり参考となっている

ことが理解できる。いずれも第Ⅲ部に属する箇所であるが，その例を挙げておこう。

「私ちは北京を発ってハルピンまで，その道のりは遠いとは言えぬが，途中恰も三ケ国を経たかのようだ」(「哈爾濱四日之一見」;『晨報』1920年10月30日)

「天津からハルピンまで，三ケ国の鉄道に乗り，三ケ国の辺境を過ぎたかのようだ」(『餓郷紀程』第六章)

或いは，美索瓦(メゾヴァーヤ)駅附近の風景描写として，「遙か遠くより望めば，ただ一面の白銀の如き平地が見えるのみである。列車は数十里を行くも，僅かに数軒の丸太小屋が見えるばかりだが，老木が枝を交わして土手の両側に沿い，さながら一幅の王石谷の『江干七樹図』である」(「自赤塔至莫斯科的見聞記」;『晨報』1921年9月11日)

「見渡す限り一面の雪景色で広々と果てしがない，道の脇には点々と数本の枝を交わした老樹が雪影を添え，正に一幅の王石谷の『江干七樹図』である」(『餓郷紀程』第十二章)

以上の二例から，『餓郷紀程』第Ⅲ部と通信文との間の類似はあきらかであろう。『餓郷紀程』や『赤都心史』のある章が，『晨報』に発表されたことがある[20]，甚しくは，それらの記事を集めて成ったものだ[21]との誤解が生じた所以も，このあたりにありそうである。

とすると，瞿秋白が類似した描写を繰り返し同一時期に記したと考えるよりも，『晨報』等への通信や「見聞記」の類いの草稿を筐底に溜めておき，モスクワ到着後落ち着いてから整理し直したと考えた方がすっきりするだろう。例えば，第九章には，モスクワ到着後の事に言及するなど，その痕跡も見い出し得る[22]。また，前述した思想的不整合も，こう考えてみれば納得がゆく。モスクワへの旅程において瞿秋白の思索が充分なる発酵を得，醸し出された成果だと考えられるわけである。

以上の事より，『餓郷紀程』は，「緒言」等を除くほぼ全篇がモスクワ到着後に書き下されたものと考えたい。それゆえ，思索的部分が主となる第Ⅱ部では隔たりが大きくなるが，草稿のある第Ⅲ部では酷似した表現が散見されるのである。また，その第Ⅲ部におけるほぼ忠実な自己の再現には，多少のズレの存在は否定しがたくとも，記述自身の信憑性にまでかかわる程のズレは生じていないと考えられる。

とすれば，瞿秋白が「トルストイ流の無政府主義からたちまちにマルクス主義へと転じていった」(23) 鍵を，『餓郷紀程』そのものの中に求めることは，あながち間違ってもいないだろう。瞿秋白が「跋」に，「この篇中に書かれたものは，本来は思想の経過である，具体的に言えば『中国からロシアに至る』道のりを記したものだが，抽象的に言えば，著者の『非餓郷から餓郷に至る』心の道のりを記したものなのである」と述べていることの意味は，決して過小に見積ることはできないのである。

そこでまず，瞿秋白の「『中国よりロシアに至る』道のり」としての『餓郷紀程』を簡単に辿っておくことにしよう。

1920年10月16日，瞿秋白，俞頌華（澹盧），李宗武（続忠）の三人は，耿済之，鄭振鐸等に見送られ，北京を発つ。天津に二日滞在した後，モスクワ駐在総領事の一行と共に京奉線に乗り奉天（現沈陽）へ，奉天からは南満州鉄道に乗り換えて長春，長春からは更に中東鉄路に乗り換え，ハルピンに着いたのが10月20日の事である。奉天駅では，中国人のポーターが非常に少ないことから「何と日本鉄道の駅で働く中国の苦力は，彼らの労働さえも『日本の』調節を受ける」ことを知り，「帝国主義の味わいとは，このようなものだったとは！」と思う。長春では，駅前広場の四囲に広がる寒林を吹き抜ける北風に，「『北国寒郷に着いた』」との感慨を深くし，そしてハルピンでは，「全くその大半がロシア化した生活になっている」ことに気付く。瞿秋白等一行は，ハルピンでは，ほんの一週間程の滞在予定だったのが，セミョーノフ軍と赤軍との戦火が断えず，すっかり足止めを喰ってしまう。ハルピンの旅館は不潔で，生活費も高く，何時出発できるという見込みも立たぬため，北京に引き返そうという意見まで出る仕末であった。瞿秋白は，この不測の事態に心の煩悶と焦燥は隠せなかったが，「毎日のように出かけてはロシアの友人を訪ねたり，ロシアの労働組織を少し調べたり，更にロシア語の書籍雑誌を集めて労農政府研究の材料とした」りして，何とかモスクワへの隘路を拓かんと努めていたのである。また，瞿秋白はハルピン工党聯合会主催の十月革命の慶祝会にも参加，その会のにぎにぎしさに「少しばかり共産党の空気」に触れたりもした。ハルピン到着から一ケ月あまり経った12月初め，漸くにしてセミョーノフ軍の敗退が伝えられ，出発の日取りが決まると，瞿秋白は歓喜に沸く。「出発だ，出発だ！ 赤い光に向かって行くのだ！」厳寒のハルピンに閉じ込められていた鬱憤は，一気に晴れ，まず経過する極東共和国への研究意欲を大いにそそられるのである。12月10日，再び汽車は動

き出し，13日満州里到着。ちょうどその時，駐露軍事代表だった張斯麐中将一行の帰国とぶつかる。瞿秋白は，彼らから伝え聞くヨーロッパ・ロシアの現状に，「労働政府の事実上の経済状況」を知り得たと思うのである。張斯麐一行が，戦後初めてチタから満州里へ通った汽車だとすれば，瞿秋白等一行は，戦後初めてその逆の道のりを辿る汽車であった。戦禍の著しい鉄路を汽車はのろりのろりと進み，12月18日，極東共和国の首都チタに着く。チタで訪れた家庭では，砂糖や茶も買えぬ生活苦を聞き，ボルシェビキに悪態をつく知識分子に出会う。チタでまた，汽車は進まなくなる。瞿秋白は，極東共和国の首脳を次々と訪ね，またチタ共産党委員会から贈られた多くの書籍に目を通しつつ，ロシア共産党の理論を僅かながらも知ることができたことを喜ぶ。翌1921年1月4日にチタをあとにした汽車は，7日，初めての「餓郷」の都市イルクーツクに至る。瞿秋白は「今日初めて赤色のソヴェト・ロシアの街——餓郷へはいった以上，彼ら『餓え』を主張する人が一体如何なる人生観の持ち主なのかをどうして知らずにおれよう」と勇んで訪問先の人々に質問を出すのだが，その「餓え」を主張する所以を聞き出すことはできなかった。9日にはイルクーツクを発ち，16日，オムスク着。西シベリアの沿線で瞿秋白の眼にしたものは，ぼろを纏ったロシア人であり，闇値の驚く程の高さであった。18日にオムスクを発ち，チュメニ，エカチェリンブールク（現スベルドローフスク）を経てウラル山脈を越え，24日，ボログダに着く。瞿秋白は「西へ来たれば次第次第に生気を覚える，駅をゆききする人の身なりも少しはましですっきり」していることに安堵のため息を洩らし，「簡単な物質文明の進歩の観念は，もともと人類の文化上非常に大きな意義をもっているのだ」と思うのである。ボログダからは南転してモスクワまで470露里，北京からのことを思えば，最早目と鼻の先にまで辿り着いたと言えよう。瞿秋白等を載せた汽車がモスクワ駅にすべり込んだのは，1921年1月25日午後10時50分のことであった(24)。

モスクワ到着後数日にして，瞿秋白等は「クニャーヂ・ドヴォル」に泊所を遷し，いよいよ本格的調査研究に取り組むのだが，その意気込みを瞿秋白はこう書き留めている。

「餓郷！餓郷！お前は私の志を鍛えあげるのか，それとも私の精力をすり減らすのか？仕事が始まった，見ていてくれたまえ。」

4

次に，瞿秋白の「心の道のり」を検討することで，彼における「餓郷」の意味を些かなりとも明らかにしておきたい。

瞿秋白は，自身の中国における環境を「餓郷」に対する「非餓郷」として把えていた。心に描く理想郷とは全く背馳する郷である。では，彼の「非餓郷」での生活とは，どのようなものであったのか。

瞿秋白の家庭は，代々仕官を続けてきた名門世家であったが，彼の父瞿世瑋の代に至って，家運の凋落は決定的となっていた。それでも，幼小時の瞿秋白は，一時裕福な士大夫の子弟に劣らぬ生活を送ることができた。しかし，瞿世瑋は生活力なき一文人に過ぎず，旧家出身の母金璇も「士の階級」の面目を保つために借財に奔走するのが精一杯であった。やがて訪れた一家の破産と離散，そして，母の自殺と父の出奔。瞿家では，炊ぐ米すらない時に尚下女を傭い，その給金さえ払えずにいたのである。瞿秋白は，自己の家庭が崩壊してゆく過程で「世間の人々の実際の姿」(25)を眼にしただけでなく，自身の属する「破産した『士の階級』」が「最も奇型化した社会的地位」にあることを肌身に浸みて感じとっていたのである。そうした環境にいて，瞿秋白は自己の魂が「いかように陶冶され鋳出されるのか」も知り得なかった。瞿秋白の好むと好まざるとにかかわらず，受けざるを得ない魂の変形は，その様を知り得ぬだけに一層の不安と懼れをかきたてた。その「病的状態」が，「魂の『内なる要求』」と激しい軋轢を引き起こし，「痛み，苦しみ，愁い，悲惨」が常に彼の魂に纏わりついていたのである。

瞿秋白の「非餓郷」における生活が，彼の思い描く「個性の発展」とは真向うから対立するものであったことは瞭然である。

そればかりか，「私は環境の改変を求める。個性を発展させ，『中国問題』のしかるべき解決を求めたい」という「個性の発展」から「環境の改変」へと伸長する青写真を持っていた瞿秋白にとって，その出発点となる「個性」において，脆くもその構想が崩れ去らんとする危機に晒されていた。瞿秋白は，自身の中に巣喰う「士の階級」意識の払拭に努めながらも，その意識を哺育する環境に身を置き続けることで，その意識への愛着を捨て切れぬ自己に焦だってもいたのである。

そこで，起死回生の一着として，瞿秋白に要請されたのは，「破産した『士の階級』」の持つ「人と人との関係」から脱け出し，未知未開であれ，

新しい可能性に身を潜ませることであった。「我々は社会に対して負うべき責任はもたぬけれども，我々自身の魂の要求に対しては絶対の責任をもっているのだ」と瞿秋白の語る通り，再生を願う中国のまだ第一に生まれ変わらねばならぬ自己自身を受け入れてくる新しい環境が求められていたのである。それを瞿秋白は「社会主義の最終理想」(26)に求め，「世界初めての社会革命の国家であり，世界革命の中心点」であるソヴェト・ロシア——「餓郷」に求めたのである。この「餓郷」こそ，「東西文明の特質と欧亜民族の天分を兼ね備えた世界的新文明を創造できる」(27)ロシア人の住む地だったのであり，革命前夜の「ロシアの国情が中国と殆ど違がわぬ」(28)ゆえ，その「新信条」(29)こそ中国を，そして自己を救済し得ると瞿秋白の考えていたものだったのである。

それゆえ，瞿秋白は，モスクワに赴くに際して，一度ならず三度まで，自分は新聞記者としては失格なのだと繰り返す反面，自己の責任が「共産主義——この社会組織の人類文化上の価値を研究し，ロシア文化——人類文化の一部分であり，旧文化から新文化へ進む出発点を研究する」ことにあるのだとも言い募ることになったのである。瞿秋白がソヴェト・ロシアを予想して「社会改造がすでにロシアで実現しているのだから，事実上彼ら——ロシア共産党——は，必ずや確実適切なる実際生活の方法を持っているに違いない」と考えたのは，「非餓郷」における，彼自身の痛切な体験より自ずから湧き上がってきた課題「人と人との関係」の理想的に解決された「餓郷」の社会生活への憧憬が反映しており，その生活を自身の手で再築することにより，旧い我れから新しい我れに脱皮したいとの渇望が脈打っていたに違いないのである。

瞿秋白はまた，中国を去るにあたって，中国社会の思想紊乱の状況により却って鮮明に浮きあがってきていた問題を強く意識していた。

当時の中国では，デモクラシーや社会主義が盛んに議論されていたが，その際，それらの概念を知悉した上で中国に根づかせるべく改良が加えられるのではなく，ただ単に「曖昧な影響の弊害」ゆえに生ずる中国学術界独自の解釈がなされていたのである。当時の風気として，共産主義と無政府主義が混同されることは日常茶飯事であったし，『新青年』（第6巻第5号）の「マルクス主義特集号」には，「バクーニン伝略」が掲載されていた。社会主義を暗殺革命と弁ずるもの(30)もあれば，人間の全体生活を改造するものと定義するもの(31)もあった。瞿秋白は「哲学研究の積習から当時の社会思想の

『思想方法』を根本的に疑っていた」のであった[32]。

瞿秋白が「決然と冒険を試みて，実際の結論，ある一定範囲の真実の知識を求めようと思った」ことには，「思想方法の整頓から着手」して「中国問題」を考え直そうという瞿秋白独自の問題意識が含まれていた。瞿秋白にとって，事実の完璧さ，広汎さはさほど必要ではなかった。瞿秋白は真に批判に耐え得る確実な事実を，「ある一定範囲」であれ，問題の出発点に確保したかったのである。すなわち，瞿秋白にとっての「餓郷」とは，自身が旧世界より抜け出し得る唯一の脱出口だったのであり，「中国問題」を解決し得る最も大きな可能性でもあったわけである。

ゆえに，瞿秋白はいう，単なる「餓郷」に対する政治外交上の交渉や重要人物とのインタビュー，或いは参観訪問だけならば，新聞記者で充分だと。しかし，「仮りに，これ以外にも，実質の社会生活を了解しようとし，人類の文化の確かに秘匿されている奥義を極め，更に人生の価値，個人と社会との間の精神と物質との両方面にわたる構造を了得せんとするならば，何の資格もない『人間』として考察せんとする社会にはいり込むに越したことはなかろう。」　かく述べることにより，新聞記者としての失格が，より豊かな実りをもたらすに違いないことを，瞿秋白は予想し確信していたのである。事実，失格していたはずの瞿秋白の認めた「莫思科通信」が，他の二人の仕事を凌駕していたのであった[33]。

次に，瞿秋白は「餓郷」への旅から何を得たのかを見ておきたい。

それを知る手掛かりとなるのは，シベリア鉄道を西へ西へと進むうちに瞿秋白が眼にした極東共和国及びソヴェト・ロシアの人々の現実生活に対して懐いた彼の感想であろう。それまでの瞿秋白にとって，「餓郷」とは，そこへ行き着くためなら「生命は私には何らの重みももたなかった」というくらいの存在であったがゆえに，モスクワに関する謡言やロシア共産党への悪罵が如何にリアリティのあるものだったとしても，それらはただに瞿秋白の「餓郷」への思いをかきたてる方向にしか作用せぬものだった。また，シベリア全体に蔓延していたという「過激主義」の「雰囲気」も，彼の志気を大いに鼓舞したに違いない[34]。瞿秋白は，チタの劇場で会った女性がボルシェビキに毒づいたのに対して，「資産階級の心理は生まれながらにかくの如き」だと評している。また，イルクーツクでは，設計技師の「党綱は立派さ！立派だよ！残念なのは，夢想なんだ，幻想さ，鉄砲，監獄，監獄……」

という怨嗟に，「全て細々とした断片で，私に明晰なる観念を与えてはくれなかった」と思うのである。だが，彼らに関しては尚「抽象名詞を愛する」者として批判を加えることは，瞿秋白には可能だった。

しかし，ヨーロッパ・ロシアへと向かう列車の中で，シベリアを通過し終わらんという時に，瞿秋白の胸中に浮かびあがってきたのは，「穏やかで愛すべき『ロシアの田舎者』を見よ，百年来奮闘し自由を争ってきたが……今や彼が口々に否認するのを許さず，やむを得ず外囲の社会的力を承認せざるを得ない」という言葉だったのである。瞿秋白が眼にしてきた人々は，「破れた衣服，片々づつ別な靴，穴のあいた帽子で，紅茶を飲むにも砂糖を入れず，兎に角にも黒パンと馬鈴薯とで其の日を送って居る」(35) という状態に大差なかった。彼らは生活苦と物資の窮乏のため，衷心からの好意をソヴェト・ロシア政府に対して懐いてはいなかったのである。

だが，瞿秋白はそれを直ちに認めることはできなかった。なぜなら，彼らの住む地こそ，外ならぬ労農の国であるはずだったからである。ロシアに赴く前の瞿秋白は，しばしばこう思っていた，ロシアは今「共産主義の実験室」であると。恰も「ボルシェビキの化学者」が「社会主義理論の公式」により，「ロシア民族の元素」を用い，「ソヴェトの試験管」の中で，ぐるぐるっと混ぜ返して試験をすれば，直ちに「社会主義の化合物」が現われ出てくるのだと思っていたのである。だが，瞿秋白は，大量の事実の前に，漸く自らの「抽象名詞を愛する」姿勢を崩し，「外囲の」影響による社会環境のしからしめる所，直ちに「社会主義の化合物」は現われず，ために苦言の生まれるのも致し方なき現実だと思い返すのである。「ざっと見れば，『黒パン』という極めて具体的な一つの事実にすぎないが，その意味は深長で，それを理解するには，無限の心の努力を費やさねばならぬ」という瞿秋白は，現実感覚を埋め得ぬ所からくる認識の錯誤への熱い羞恥を告白していた。ここに至って，「豁然と悟らねばならない」と瞿秋白は思う。

しかし，今一度瞿秋白の思索の跡をたぐり寄せてみれば，彼はチタを離れるにあたり，生活を明らかにする情感は，はっきりと理解できなくとも意識の誤ちを引き起こさぬがゆえに「これからは，理論の研究，事実の探訪の外に，社会心理の反映された空気をしっかりと体得し，社会組織のあらわれである現実生活をしっかりと感じとり，更に私の心理の内なる要求に応じて，更に後二者より，多く出世間の栄養を求めねばならない」と述べているので

ある。「理論の研究，事実の探訪」と同じく，「現実生活」への注視も，明瞭に瞿秋白の意識にのぼっているのである。にもかかわらず，「夢想だ！幻想だ！社会を離れて個性を求めても，個性はどこにあるのだ！」と叫ばねばならなかったのは，「現実生活を見なければ絶対にはっきりと了解できない」という頭の中ではわかっているつもりの「現実生活」に，結局は足をすくわれてしまったと考えざるを得ないように思う。瞿秋白は「社会革命，ロシアの社会革命は，社会思想の狂瀾ではなく，社会心理――実際生活の『心』の面――及び経済生活――実際生活の物の面――の和合して映し出された蜃気楼なのだ」と思うのである。瞿秋白の得た結論は，簡潔明瞭である。

「『実際生活の中でのみ学習でき，実際生活のみが人に教訓を与えることができ，実際生活のみが社会思想を産み出し得る――社会思想は副産物にすぎず，極めて粗っぽい現象なのだ。』」(36)

ここに漸く瞿秋白の思索も核を得る。「感覚の中の実際生活の教訓が，殆ど私に社会哲学を研究する新しい方法を与えてくれた」との確信が思索の支えとなるのである。

勿論，こうした現実認識の深化により，瞿秋白があらゆる実際生活中の混乱に理解を示し得たわけではなかった。瞿秋白等一行の貨車の鎖が切断されて食料を盗まれたことに対して，瞿秋白は同行者の激怒を記すことを忘れてはいなかった。モスクワを目近かに控えた汽車の中でも，瞿秋白は尚「定まらぬ希望」を懐かねばならなかったのである。

だが，瞿秋白が自身の体験した生活の混乱から「外囲の社会的力」を割り引き，その中に尚革命的意義がひそんでいるに違いないと考えたことは，彼の「抽象名詞を愛する」姿勢の継続であったと言えなくもない反面，それ程までに瞿秋白の「中国問題」の解決にかける意気込みは彼の頭を熱くほてらせていたのだとも言えるだろう。「シベリアの中世紀社会，半封建の経済組織」を「ロシアの所謂プロレタリア革命の偉力がついに次第とそれを侵犯し，蚕食しているのだ」と考えた瞿秋白は，セミョーノフ駐在時のチタに四方からパルチザンが蜂起し，生活の困苦をも顧みずに彼の軍を追い払ったのは何故なのかに思いをめぐらせる大庭柯公氏(37)と同じく，眼前の混乱の中に，その混乱に見合うだけの歴史的或いは社会的価値の存在を見い出そうとしてい

たのであった。

瞿秋白は，兵燹の尚くすぶる生々しい跡を筆に留めながら，混乱の甚しきがゆえに一層「混乱」の源たるモスクワの姿を見極めることに対して興味を掻き立てられていったに違いない。ともあれ，瞿秋白自身の示した混乱は，現実認識の深化という果実を伴いながら，モスクワまで持ち越されていったのであった。

瞿秋白は，「一切の一切は全てこの『実際』の上に置かれているのだ」という強い意識に支えられ，「理智の研究は科学的社会主義に重きを置き，魂の栄養は思い切って神秘な『ロシア』に融合するのだ」と言い切る。個性を形成する両面からの影響の溶け合った瞿秋白が，「実際生活」に面と向かい合うことで，しっかりと地に根を下ろし錬成されてゆくことを，彼は目論んでいたのであった。

以上のことから，瞿秋白が「餓郷」への出発にあたって懐いていた今一つの問題意識は，極めて帰納的な思考方法の確立として実を結んでいったことがうかがえよう。それは，マルクス主義を正式に受容する下地を作るものだったとも言える。

だが，故郷を離れはるばると「餓郷」に一人いたのでは，人生の「実際」からは遠く隔たり瞿秋白のいう原則に合わぬではないかという意見もあるかも知れない。その意見に対して，瞿秋白はこう答えている。

> 「しかし，それとは別に，私の小舟の舷側の下には，餓郷の『実際』があるのだ——羅針盤さえ定めておけば，いつの日にか宇宙の心の海を経めぐりて，真実の『故郷』に帰る日は来る」(38)

「真実の『故郷』」，それは瞿秋白の心中に築かれた「餓郷」の，「実際生活」における実現の地である。実現に必要なのは，志であり方法である。「血気の平静」さも必要ならば，「内なる力の湧出」も必要なのだ。それらを二つながらに身につけた瞿秋白が誕生する地こそ，「餓郷の『実際』」なのであった。

5

最後に，『餓郷紀程』の文学的特色についても簡単に触れておきたい。

その特徴としては，仏教用語の援用，或いは『紅楼夢』からの影響を挙げ

得ると思うが，とりわけ力のこもった筆緻に風景描写の多いことも特色として挙げられよう。その一例としてハルピンの風景をとりあげておこう。

「其時雲影翻開，露出冷氷氷 亮晶晶的一輪明月，四囲還擁着寒霧，好像美人出浴披着軽紗軟帔似的，馬路旁寒林矗立，一排一排的武装着銀鎧銀甲，万樹枝頭都放出寒浸浸的珠光剣気」(39)（――線，線〰〰は引用者）

僅かに八十字程度の描写の中に，三言の詞組（――線）が三度，四言の詞組（〰〰線）もまた三度使用されている。こうした三言，四言の詞組の頻用が，煌々たる月の冴え冴えとした明澄さや，その月光に映えた銀世界の異様なまでの木々の輝きぶりを見事に読者の脳裡に再現してみせてくれるのである。「凡そ描写の意に満つる所は，いくらか散文詩の気味がある」と『赤都心史』の「序」にみえるのと同じ筆緻が，この箇所ばかりでなく，全篇のそこかしに感じとられるのである。

一方，すでに見てきたように，瞿秋白は遠路の汽車の旅に身を揺すられながら，繰り返し理論と体験との間の往復を重ねて思索を深めていった。その瞿秋白の思索の模様が，不図した拍子に風景描写の筆に滲んでくる。自然を描きつつ，自己の内面へと筆先が移ってゆくのである。「凄々として凍てる月，冷冷たる寒風は，キラキラした凍える雪を映して，我が心に透きとおり」，瞿秋白の心を照らし出す。瞿秋白は思う，「ストア」主義じみた自己の生活も「単に精神生活の安寧を求めているだけにすぎない」のではないか，いやひょっとすると「ストア」主義だなぞと言っておきながら「物質生活の安寧を求める傾向」に流れているのかも知れぬ，と。清冽なる風景に，瞿秋白は心の濁りを澄ます視点を与えられる。

瞿秋白の自然から受ける感触及び風景描写に誘発された筆の伸びは，自然自身の中に思想の形を見る所にまで進む。バイカル湖のひらけた湖面に眼を奪われる瞿秋白は，その湖面に氷結した波の様に観察の眼を注ぐ。湖辺に近い浪は，奇岩険石の如く突兀として凍りつき，湖心に近い波は水晶の絨緞の如く自然の波紋のまま凍てついているのであるが，その突兀さが「『自由』な波濤」の醜態を晒し，自然な波紋が「その『遙かな志』を逐って最後の安けさを求めている」姿の静止美を見せていると瞿秋白は感じるのである。「自由」を求める個性と「最後の安け」き環境を目指す「遙かな志」とが，一つの湖面に排斥し合うことなく共存し，春の暖風による解凍を静かに待っている。この描写には，車窓に拡がる風景とも，瞿秋白自身の心とも厳密に分か

ち難い一体感が漂っている。更に，ウラル山脈に蜿蜒と続く針葉樹林帯を眺めつつ，瞿秋白はその木々の枝々をびっしりと覆い尽す豪雪の凄まじさに自然の偉大を見ず，木々の「克己よく強暴に耐える」度量を見るのである。そして，強風に雪を払われた枝の緑が鮮やかに人の眼を打つや，そこに「『春のなごやかさ』の先声」を確かめるのである。瞿秋白の眼には，雪の重みに撓う枝が，環境により個性を抑えられた様に映り，雪の吹き払われた枝々のざわめきが，「内なる力の充分な発展」を得れずとも，尚その方向に「大潮の澎湃として轟々たる勢い」で進んでゆく「天意」の暗示を読みとるのである。ここでも瞿秋白の木々に寄せる思い，或いは思いの凍りついた姿を木々に見る相互に照り映える文章の綾が，表現に優れた喚起力を賦与している。

こうした筆運びの延長線上に，『餓郷紀程』の最終章が存在することは間違いない。最終章は，只一本の老木を描くことに費やされているのである。

連山に抱かれた荒漠たる曠原，豪雨強風は容赦なく地表を叩きつけ，雪深く流れも凍てつく地，そこに老木が一本立っている。ねじれた枝をつけたふしくれだった幹には，数え切れぬ年輪が刻み込まれている。彼は，量り尽せぬ大いさを持ち，量り尽せぬ苦しみを舐めてきた「天然の叛徒」なのである。故に，自然の厳しい試練に一日とて休む暇なく責めたてられ，ついに，彼は微風にも巨体を揺るがせ，小雨ほどでは痛痒を感じぬ神経の麻痺に陥ってしまうのである。しかし，老木には尚最後の一戦を挑む余力が残されており，「春意の内なる力」を大いに揮う可能性がひめられている。だが，悲しいかな，老木には「春意の内なる力」がいつ充分な発展をとげるのか，如何にして束縛より逃れ出るのかには思いが及ばない。瞿秋白はたまらずに老木に呼びかける，「春意の内なる力」，それは，自らを信ずることなのだ，と。「神聖な老木よ，生まれながらに永遠に磨滅することのない自らを信ずる力があるのだ。」

果たして，南国の風雲興こるや，山砕け海逆立ち，全宇宙が動揺して，全太陽系は破滅の危機に瀕するのだが，その危殆の只中に，生の兆しが育まれ，突如として春意の内なる力の光があらわれ億万丈の赤い舌を吐きあげ，大空を覆い尽してしまうのである。その舌に触れた老木の幹は裂け，そこから，自らを信ずる所の春意の内なる力が飛び出すや，老木の根元には，柔らかな新芽が萌え出ずる。しかし，赤い舌の猛威が鎮められると，苛刻なる天然は，ただ一つ取り残された新芽に，更なる暴虐を加え，冷酷さを増してゆく。瞿秋白の叫びは，以前にも増して声高になる。

「春意の内なる力よ！ お前は宇宙に満ち溢れているのだ，暫くこの不自然ながらもその能力を越えて萌え出でた新芽を借りて，少しばかり発散せよ。」(40)

今暫し，老木と新芽を中国と瞿秋白に見立てるならば，「春意の内なる力」とは，「宇宙の『活力』」或いは「緒言」に見える「暗い影」にも比擬し得よう。また，「『春のなごやかさ』の先声」の充分に発展した力と考えるならば，優れた個性の奔騰でもある。だが，「春意の内なる力」とは何よりも，時「春」に至らば，とどめ得べくもない勢いで満天に吹きこぼれ，万物の回春を約束する幾千万の新芽の潜在力を表わしているはずだ。今は厳冬ゆえに，「春意」も「内なる力」でしかあり得ないとは言え，いっぱいにまで引き絞られた弓矢の如く，今にも飛び出さんとの緊迫感漲る力であるはずなのである。

「漸く彼の内なる力を自覚した」瞿秋白は，すぐそこにまで近づいて来た「春」の跫音を聞きつけていたのである。その跫音に触発され，更に多くの「内なる力」が湧き出てくることを，瞿秋白は願った。個性の中に一つ一つ「春意の内なる力」の発露を見出してゆく時，瞿秋白の「世間的な『唯物主義』」の道理によって，それは孤立した個ではなく，社会を体現し得る個としての力が備わってゆくはずだ。瞿秋白の「春意の内なる力」への希望として，「とりわけ，この老木の傲り高ぶる変わらぬ姿に背いてはならない」と述べた真意が，もとより中国再生への熱誠にあることは疑いないが，「春意の内なる力」を介して自己に下した決意の程をも示していたに違いないのである。

「偉大な人間が偉大なのは」，「彼がその時代の大きな社会的要求（中略）に，彼をもっともよく役立たしめることができる特質をもっているからである」という(41)。瞿秋白の心にひそむ「春意の内なる力」こそ，この特質の象徴的顕れと言えるだろう。

6

『餓郷紀程』は，具象と抽象，道のりと心の道のりとが混然一体となって織り成されたアラベスクである。モスクワへと吸い込まれてゆく渦の緩やかな大円が，徐々に同心円の直径を狭めつつ速度を増し，ついに急転直下，泡立ち闇に消え去るや否や，瞿秋白がその闇から飛び出し，モスクワの街並み

に熱いまなざしを注ぎつつ思索にふけっている……。かくの如き印象が，縦横に錯綜する貫乳の如くに『餓郷紀程』全体を覆っている。瞿秋白が生死を賭した旅の軌跡だけに，良くも悪くも彼の姿が赤裸々にはだけ出され，あまつさえ，当時の歴史的事実の生々しさ，極北寒国の風景の美しさ等が見事に調和をみせてぐいぐい読者を引っぱってゆくのである。

『新社会』の同人であった王統照は，同書の出版後に逸早く「剣三」のペンネームで書評を『晨光』雑誌に寄せている(42)。彼は読後「久しく胸中に鬱積した感嘆を全てぶちまけずにはおれない」程の衝撃を受け，「彼のような脆弱な体にも胆斗の如き精神と魄力が宿り，何と1920年という危険な時期に，人々に恐ろしき道と見做されていたソヴェト・ロシアへの大道をすたすたと歩んでいった」ことに対する驚きと畏敬の念を表白している。

また，茅盾は「今世紀の初めに生を享け，旧社会に生涯の大半をすごした知識分子にとって，『餓郷紀程』は非常に大きな啓発を与えるに違いない」ことを述べ，「私は確かにまず『餓郷紀程』により秋白同志を識り，しかもこの基礎の上に，彼に対する私の尊敬と敬慕の念も生じたのである」と回想している(43)。

茅盾の言葉にも明らかな如く，『餓郷紀程』は，「自らロシアへ行き観察できぬ」ゆえ，「他人のロシアに関する著作を択んで読むより仕方がない」(44)人々に恰好な材料を提供した点にその大きな意義があったのではあるまい。勿論，初めての中国人の手になるソヴェト・ロシア紀行としての意義も小さくはないだろう。しかし，『餓郷紀程』は，「今幸いにも心の海の灯台を見出した」という瞿秋白自身の彷徨と求索の一つの成果として，たとえそれが「ただ一縷の赤光にして，ぼんやり薄暗い」存在だったとしても，「何とか涯なき前途を弁別することはできる」有効性を備えた成果として，「ちょうどロシアの新思想運動中の煩悶時代の如く，『煩悶とは一体何か？わからぬ』」と呟かざるを得なかった当時の多くの青年たちに，一つの思考の拠り所を与えた点にこそ，より大きな時代的意義は胚胎していたと言えるのではないだろうか。時代の瘋癲たることに臆さぬ瞿秋白が，「いつも皆のため光明の道を切り拓こうと思って」いたことの何よりの証左が，この一本なのであった。

『餓郷紀程』は，1922年9月，商務印書館より「文学研究会叢書」の一冊として出版された。その際，友人の手により『新俄国遊記』と改題されたという。同書は，1926年に第四版まで印刷されたことが記録に残されている(45)。

（注）

(1) 蘭鴻文「瞿秋白赴蘇採訪文章中的幾個史実」（『新聞研究資料』1981年第2輯）所引

(2) 沈頴「関於秋白的一点回憶」（『憶秋白』人民文学出版社1981所収）

(3) 鄭振鐸「記瞿秋白同志早年的二三事」（前出『憶秋白』所収）

(4) 孫九録「瞿秋白在常州府中学堂和北京的一些情況」（『党史資料叢刊』1980年第3輯）

(5) 李克長「瞿秋白訪問記」（『国聞週報』第12巻第26期，『共匪禍国史料彙編』第二冊所収）

(6) 『五四時期期刊介紹』第一集上，下冊（三聯書店1978）参照

(7) 例えば，「我在俄羅斯的生活」（『新青年』第8巻第1期）と「俄国之真相及其将来」（『東方雑誌』第17巻第3号）における食料配給制に対する見解など。

(8) ラッセル「游俄之感想」（『新青年』第8巻第2期），Authur Ransome「一九一九年旅俄六周見聞記」（『晨報』1919年11月12日～1920年1月7日）などは，文中にその形跡を求めることができる。

(9) 『ソヴェト同盟共産党（ボルシェビキ）歴史』（外国図書出版所1950モスクワ）第365頁

(10) 『晨報』1921年1月18日第6面所載記事

(11) 魯迅「答国際文学社問」（『魯迅全集』第6巻人民文学出版社1981所収）

(12) 耿潔三「耿済之的青少年時代」（『新文学史料』1983年第3期）尚，Paul G. Pickowicz『Marxist Thought in China――The Influence of Ch'ü Ch'iu-pai』(University of California Press 1981) は，ロシア帝国の中国領事館或いは中東鉄路の職員の地位が約束されていたというが，『餓郷紀程』中の記述に拠ったにすぎぬであろう。

(13) 「我在新俄羅斯的生活」（『新青年』第8巻第1期）

(14) 『瞿秋白文集第一冊』（以下『文集㈠』と略；人民文学出版社1953）第27頁

(15) 「餓郷記」（『因寄軒文集』道光13年新鐫所収）

(16) 『文集㈠』第6～7頁

(17) 「中国的労働（ママ）問題？世界的労働（ママ）問題？」（『新社会』第4号1919年12月1日）

(18) 「伯伯爾之汎労動主義親」（『新社会』第18号1920年4月21日）

(19) 丁景唐，文操共編『瞿秋白著訳繫年目録』（上海人民出版社1959）には，「1921年1月4～25日作」としてみえる。『時事新報』1921月8月26～29日に連載された外，俞頌華「俄国旅程瑣記」の末にも付せられた（『晨報』1921年9月11，14，15日）。のち，俞頌華『游記第二集』（晨報館1924）に収められたという。

(20) 唐弢主編『中国現代文学史（一）』（人民文学出版社1979）第174頁

(21) 「為大家闢一条光明的路」（『光明日報通訊』第9期，註(1)蘭鴻文論文所引）

(22) 『文集(一)』第53頁

(23) 「多余的話」（周永祥編著『瞿秋日年譜』広東人民出版社1983には，補正版が収録された）

(24) 「自赤塔至莫斯科的見聞記」（俞頌華「俄国旅程瑣記(七)」，『晨報』1921年9月15日）

(25) 魯迅「《吶喊》自序」（『魯迅全集』第1巻人民文学出版社1981所収）

(26) 「多余的話」

(27)，(29)李大釗「法俄革命之比較観」（『李大釗選集』人民出版社1978所収）

(28) 「『俄羅斯名家短篇小説集』序」（『文集(二)』所収）

(30) 惲代英「論社会主義」（『少年中国』第2巻第5号，林代昭，潘国華編『馬克思主義在中国（上）』清華大学出版社1983所収）

(31) 陳独秀「関於社会主義的討論」（『新青年』第8巻第4期）

(32) 李達はそれに最も早く気付いた革命家の一人であった（「什麼叫社会主義？」など参照，『李達文集』第1巻人民出版社1980所収）

(33) 註(1)に同じ

(34)，(35)増田正雄氏述『西伯利旅行の感想』（パンフレット）大正9年10月6日講演発行所，発行年不明

(36) 『文集(一)』第79～80頁

(37) 「チタを発するに臨みて」（『読売新聞』大正10年7月18日，『露国及び露人研究』中公文庫昭和59所収）

(38) 『文集(一)』第92頁

(39) 同上第96頁

(40) 同上第90頁

(41) プレハーノフ『歴史における個人の役割』（岩波文庫1977）

(42) 剣三「『新俄国游記』」（『晨光』第1巻第3号，1922年11月30日）引用文は，中文系56級瞿秋白研究小組「春来第一燕——論『餓郷紀程』和『赤都心史』」（『中山大学学報』1960年第2期）所引による。

(43) 茅盾「紀念秋白同志，学習秋白同志」（『人民日報』1955年6月18日）

(44) 「晨報叢書英国蘭姆塞著『一九一九旅俄六週見聞記』」広告文（『新青年』第8巻第1期）

(45) 前出『瞿秋白著訳繫年目録』参照